

Nara Women's University

六年一貫における進路状況

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学文学部附属中・高等学校 公開日: 2010-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 博史, 木村, 維男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/2147

六年一貫における進路状況

進路科 木村 維男 松本 博史

はじめに

本校における進路指導の実態は、最近10年とそれ以前とは大きく様が変わりしてきた。以前は、「本校の教育は大学進学を目的とはしていない、大学受験は個人的な問題であり、学校が関知すべき事柄ではない」というような極論もまかり通っていた。その時代の生徒達は、各自で進路を決定し、受験先を選び、教師は調査書を作成するだけ、というのが大勢であった。しかし、最近では進路指導部と高校の担任が、進路指導に積極的に関与し、予備校の入学まで世話をしているというのが現実の姿である。

今後の本校の進路指導、進路保障を考えるために、六年一貫教育になってからの進路の状況を総括する。その際、プライバシーに抵触しない、紀要の内容として適当なものと言う観点から、中高六年一貫実施後の昭和53年度から60年度卒業生までを考察の対象とした。また、一貫実施後、昭和58年度卒業生からは、それまでの中学入学選抜方法（学力検査のみで選抜）とは異なり、附属小学校から約50名接続し、残りの定員の3倍になるように、応募者をまず抽選で選抜し、その後入学検査を実施するという方法を取っている。このように、選抜方法が異なる対象を分析するため、便宜上昭和53年度～昭和57年度の卒業生656人を＜非抽選＞組と呼び、昭和58年度～昭和60年度卒業生367名を＜抽選加味＞組と呼ぶことにする。なお、考察の主たる内容はデータ数の関係から、進路指導のうち大学進学を中心に行う。

(1) 昭和53年度から昭和60年度卒業生の進路状況

次の表は、今回の考察の対象となる学年の進路状況の一覧表であり、今回の分析の基本資料である。

表 1

卒業年度	卒業生数	国公立大学				私立大学				短期大学				専門学校				就 職				自宅学習	
		現役	一浪	二浪以上	計	現役	一浪	二浪以上	計	現役	一浪	二浪以上	計	現役	一浪	二浪以上	計	現役	一浪	二浪以上	計	人数	割合(%)
53	136	45	23	5	73	31	16	5	52	9			9	1	1		2	0			1	50	36.8
54	128	45	17	4	66	30	22	2	54	9	1		10	0	2		2	0			0	44	34.4
55	131	45	19	7	71	28	21	1	50	6	1		7	1			1	3			3	48	36.6
56	126	35	27	9	71	31	16	2	49	6			6	1		2	3	2			2	51	40.5
57	135	38	19	4	61	40	21	6	67	5			5	2	4	1	7	1			1	49	36.6
58	130	29	19	8	56	28	19	7	54	11	5		16	2		2	4	2	1		3	58	44.6
59	118	25	19	2	46	33	21	4	58	9			9	2			2	3			3	46	39.0
60	119	27	(20)		(47)	30	(23)		(53)	5	(1)		(6)	0			(0)	2			(2)	55	46.2

(注) 60年度卒業生で一浪の者は、国立大学の入試制度が以前と大きく異なるため()をつけた。

(2) 大学・短大進学者について、現役と一浪の割合（対卒業者数）

表 2

	国公立大学		国私立大学		大学・短大	
	現 役	一 浪	現 役	一 浪	現 役	一 浪
非 抽 選	208 人 31.7 %	105 人 16.0 %	368 人 56.1 %	201 人 30.6 %	403 人 61.4 %	203 人 30.9 %
	47.7 %		86.7 %		92.3 %	
抽 選 加 味	54 人 21.8 %	38 人 15.3 %	115 人 46.4 %	78 人 31.5 %	135 人 54.4 %	83 人 33.5 %
	37.1 %		77.9 %		87.9 %	

高校卒業後、現役で大学・短大に進学する者は、〈非抽選〉、〈抽選〉で61%、54%である。一年後には、それぞれ92%、89%となる。したがって、卒業一年後には、約90%の者が大学・短大に籍を置いている。また、1.8%の者が専門学校に、1.4%の者が職に就いている。残りの約7%の者が進路未定の状態である。表1、2からみて、〈非抽選〉〈抽選〉の差異は、私立大学、短期大学、専門学校、就職への進路を取るものの実数は、ほとんど変化がない。しかし、国公立大学では、大きく変化している。本校の目指している非エリート化は確実にすすんでいると考えられる。

短期大学進学者は、年度によって若干の差はある。しかし、ほとんどが現役での進学者である。一浪した者は、大部分が4年制大学に進学し、短大はごく僅かである。

短大進学者については、以前は第一志望の4年制大学が不合格の場合に、次善の策として、どこかの短大へという生徒が多かった。しかし、最近の短大志望者は、自分の将来の生活設計を考慮して、英文科、家政科、初等教育、芸術方面の短期大学へと志望学科を絞り、進学を早くから決めている生徒達が顕著になってきている。

(3) 地区別、国公立大学進学者数

表3は国公立大学への現役進学者と、一年後の進学者を地区別に調べ、その国公立大学進学者に対する割合を表したものである。

表 3

	北海道		東 北		関 東		中 部		近 畿		中・四国		九 州		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
非 抽 選	4	0	2	1	13	9	10	5	130	124	11	2	2	0	172	141
	4 1.3 %		3 1.0 %		22 7.0 %		15 4.8 %		254 81.2 %		13 4.2 %		2 0.6 %		313	
抽 選 加 味	0	0	2	0	6	2	8	3	38	29	2	1	1	0	57	35
	0		2 2.2 %		8 8.7 %		11 12.0 %		67 72.8 %		3 3.3 %		1 1.1 %		92	

表2から、国公立大学への進学者は、それぞれの卒業生に対して
 (非抽選) 47.7 % (抽選加味) 37.1 %

である。国公立大学への進学率は選抜方法の差異により、10.6%の差がある。

また、表3から近畿圏の国立大学への進学者は、それぞれの卒業生に対して
 (非抽選) 38.7% (抽選加味) 27.1%

であり、近畿圏の国公立大学への進学率は11.6%の差がある。以上のことから、国公立大学への進学者の減は、近畿圏への進学者減とほぼ一致している。また、近畿以外への進学者の割合は、あまり変化していないといえる。しかし、中部地方への進学は、大きく増加している。

表4は、国公立大学進学者のうち、近畿圏への進学者の男女別の割合を表したものである。

表 4

	男子	女子
非抽選	75.6%	87.6%
抽選加味	66.7%	82.9%

女子の4.7%減に対し、男子は8.9%減で、男子の減少が大きい。奈良県の場合、大阪や京都府下の大学に進学しても、専門課程になると、下宿することが必要となる者が増えてくる。したがって、最初から自宅通学はあまり考えず、自分の希望する専門の内容と大学の特色をよく研究し、幅広く全国に進学先を求めるのが望ましいと思われる。

女子の地元志向は、「女子の下宿生活は許さない。」という家庭の考えに影響されていると思われる。また、女子は同じ近畿圏でも、奈良・大阪よりも神戸に魅力を感じ、ムードで進学したがる傾向がある。これは、奈良が閉鎖的な歴史の古い、海にめぐまれない地域であり、開放的で、エキゾチックな気分にかれるためと思われる。

(4) 現役の時の受験

表5 四年制大学の受験率
 (受験者数/卒業生数)

	男	女	全体
非抽選	97.5%	96.7%	97.0%
抽選加味	96.8%	91.8%	94.3%

短大の受験率

非抽選	8.7%
抽選加味	12.8%

表5は、現役時の四年制大学と短期大学の受験者の割合を示している。この表より、現役の時に四年制大学を受験する者が、女子において5%減少していることが分かる。これは、企業的女子社員採用の条件が大学卒より短大卒になっていることに影響されている。四年間の大学生活より、社会での労働に意欲をもつ者が、短大進学を第一志望とする傾向になりつつあると思われる。したがって、進路指導をする者は、今後それぞれの短大の内容・特色を詳しく把握していかなければならない。

表6 一人あたりの受験校の数(延受験者数/受験者数)

四年制大学

	男	女	全体
非抽選	2.8校	3.0校	2.9校
抽選加味	2.7校	3.1校	2.9校

短大

非抽選	1.7校
抽選加味	1.9校

表6は、現役のときの一人あたりの受験校の数(出願校数ではない)を示している。この表より、一人あたりの受験校の数は、非抽選・抽選加味のいずれにおいてもあまり差はなく、男子は3校弱、女子は3校の大学を受験していることがわかる。けれども、生徒個々については、1校のみ受験する者から、浪人だけはしたくないとの強い考えから10校以上受験する者まで大きな差がある。全体的に、「1年ぐらいの浪人は人並」との考えが男子に強く、「合格すればラッキー」と、無理な受験をする者が目立つ。

(5) 就職について

58年度卒業生以降61年までの4年間における就職者は8人で、その内訳は

奈良県警 2人 地方公務員 2人 サービス業 3人 製造業 1人

である。一般企業に就職した4人中、学校が生徒および保護者との話し合いの結果、職種・企業を決定したのは1人だけである。他の3人は、縁故または推薦者のある就職である。

高三の学年始めにおける就職希望者は、例年ほとんどなく、そのため、企業からの求人申し込みは大変少ない。今後、就職希望者が増加した場合、企業とのつながりが全くないため、そのときの就職指導は、かなりむずかしいと思われる。

(6) 本校の進路指導について

六年一貫における中学生に対しての進路指導を、いつ、どのように行えばよいのか。長年課題になっているが、具体化できないまま、各学年にまかせた形になっている。そのため、あまり進路について考えることがなかった生徒が、高校生になった途端、自分の進路について考えはじめ、不安になる。そして、どこから、どのようにして知識や判断材料を得たらよいのか分からないまま、時を過ぎてしまう。そこで、高一・高二のHRの時に

1. 進路とは何か。
2. どのように進路を決定するか。
3. どんな進路があるか。
4. 学習について。
5. 受験について。

などについて触れ、学年P・T・Aにおいて、「家族との対話」と「社会に目をむけさせる」ことを依頼する。そして、自分の進路を考える1つの材料として、進路適性検査と全国模試を実施する。つづいて、高二で2回、高三で4回全国模試を行い、それらをもとにして、そのつど担任が進路指導を行う。

高校生には、1週に33時間の授業（そのうち、1時間はHR、1時間は特活）を行っていて、進学のための時間外の補習は、学校としては行っていない。ただし、高三生は、いろいろな学校行事や家庭学習で授業時数が不足するための（高三生の実授業は、年間約22週分）、夏季休暇中、多くの教科担任が自主的に補講を実施している。

本校の教科方針は、中高6年間の内容を、5年に圧縮するのではなく、6年かけて指導することになっている。これは、受験のための授業にならないよう、あくまで学問的な深さ・広さの指導に努めているからである。この方針は、教科指導のあるべき姿といえるが、進路指導の上からは、受験のための演習が十分ではないという短所も持っている。そのかねあいは非常に難しく、今後の大きな課題といえる。